

教化センター通信 ダルマアピール

発行 真宗大谷派三教区
教化センター
三教区本町2-1-57

「原始僧伽の姿に思う」

教化センター副主幹 藤波法英

今年七月から第八期三条教区教化センターにて学んでいく機会を頂きました。すでに同センターを修了された先輩方も多く、共に学ぶ一人に加えられたことに喜びを感じています。

さて、新たな学びが始まるにあたり「僧伽」ということを思います。僧伽といいますが、仏伝等で伝えられるところの五比丘の姿がまず頭に思い浮かびます。その初期の僧伽が形成された釈尊を含む六人の様子を、『仏教聖典』(山口益編)にはこのように描かれています。

比丘たちよ、このようにして、まさにわたしが二人の比丘に説法している間に三人の比丘は托鉢にでかけ、三人の比丘が托鉢で得たものでわれわれ六人が生活した。比丘たちよ、また、まさにわたしが三人の比丘に説法をしている時には二人の比丘は托鉢に出かけ、二人の比丘がその托鉢で得たものでわれわれ六人が生活した。

『仏教聖典』(山口益編) (六十六頁)

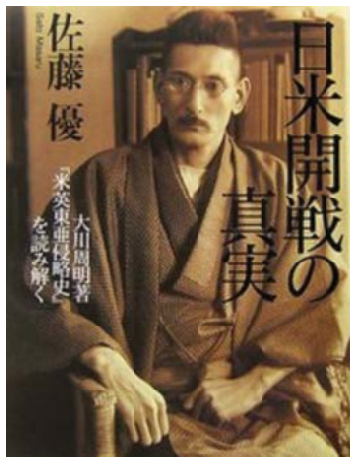
とあります。ここで注目したいのは釈尊滅

後から長い時間をかけて極端に学問化していった阿毘達磨仏教や、戒律を持つ出家教団にあるような厳格なイメージが全く無いということですが、そんなところから少し想像を働かせてみますと、苦行にばかり果てていた五人の比丘たちは釈尊に再会し、今もいままで実践していたその苦行を捨て、托鉢による共同生活をしながら身も心も豊か

になってゆくという姿が思い浮かびます。そして、そのような環境の中でこそ自己自身の課題と向き合うことが可能にし、仏陀となられた釈尊の前に改めて身を据え、「尊いお方、我々は世尊のもとで出家したく存じます。」と、ひとり、またひとり五人の比丘は釈尊と同じ境地に至ったようです。

『日米開戦の真実』 佐藤優 著

第十組 淨敬寺 永寶 卓



月忌参りで御門徒のお宅に寄せていただくことがありますが、戦争回避の統一見解があるものではない」と言われる。皆、戦争回避の統一見解があるものではない」と言われる。皆、争に突入したのは何故か?」この問いこそ、戦争を知らない世代の一番の問いなのではないでしょうか? そんな時、出遇ったのがこの本です。

カバリーの写真は、大川周明という人物です。大川周明とは、戦中当時、日本の最高の知識ブレインであった人物です。東京裁判の公判の映像で、東条英機の頭を後ろから叩く人物といえ、ピンとくるのではないのでしょうか。大川周明は、自らの著『米英東亜侵略史』において、米・英の非道義的行為を完璧なまでに分析しています。その分析が完璧すぎるがゆえに、当時の日本首脳陣は「我に義あり」として、剣を振りかざしたのではないのでしょうか。

私は仏事や学習会、様々な研修会等に足を運ぶとき、この初期の僧伽の様子を思い出します。そして今年から教化センターで学ぶという事もこの僧伽の歴史に加わることだと感じます。ですから、言うまでもなく苦行が始まるのではありません。また、学問として仏教を学ぶのでもありません。この新たな学びに求められていることは、托鉢に出ながら聴聞した五比丘と同様に日常生活をもって身と心を豊かに整え、改めて仏法の前に身を据えることなのだと思うと、こ

